

## 医療看護とスピリチュアリティ、そして日本的“思いやり”倫理

稲垣久和

2015年度のTempleton第2回目の研究会である。今までの研究会報告、レジメ資料などはサイト (<http://www.tci.ac.jp/smj/>) にある。

1.

2015年度第1回目 6月6日

森村修氏はケアの側面からこのテーマにアプローチした。ケアとは「ケアする人もケアされる人もケアという関わりの実践を通じて、互いに少しでも＜幸福＞になることが目ざされている実践的な行為」と定義する。ケアの倫理とは「倫理学」という学的体系性はなく臨床知である。ケアというのは動的関わりであり、その人の傍らに物理的に居るだけでなくスピリチュアル（魂的）に居ることである。この場合、魂とはその人を失ったときに始めて分かるような「その人としての掛け替えのなさ」を指している。人が誰かをケアするのは「私たちの生の奥底にある魂がその人の魂と触れ合うため」である。ケアの意味は私たちの傷つきやすさを支援しエンパワーすることである。ケアとは私たちの生の全体と深く結びついている。

小西達也氏は相良亨を参考にしつつ『日本的宗教性』に基づいた日本的スピリチュアルケア試論』について語った。スピリチュアル・クライシスに陥ったときに、当人のビリーフ再構築のプロセスにおいて「より深いリアリティへの目覚め」がさらに深まるとその個人の内面に「はたらき」が現れる。「はたらき」とは何か。それは「おのずから」なる“生成”であり、日本人の意識の古層に流れてきた日本語でいう「自然」（じねん）に類似している。古事記に出てくる「産霊の霊力」であり①万物生成のはたらき（宇宙を通じたはたらき）。②現実にはいかに対処すべきかを個人の内面に生成するはたらき。それらは人格的超越者ではない。この「日本的宗教性」に基づいたスピリチュアルケアとは、ケア対象者が「おのずから」「はたらき」に目覚める生き方を見出すサポート。押し付けではなく、対象者の生育暦等の様々なテーマについての語りの中で、サポート提供者は「理解＝自己表現のサポート」を提供していき、その中で「現実をどう捉えるか」、「自分が何を望んでいるか」といった事柄を明確化していく。「はたらき」を公共世界の中で客観的に証明することは困難であり、むしろ現世界観を修正して世界4のリアリティを承認することなどが考えられる。

2.

死生学専門の若林一美『いのちのメッセージ』の中に、近代ホスピス運動の創始者シシリー・ソンドースについて書かれている。シシリーが一人の患者から体験的に学んだこととして「末期患者のケアにとってももちろん知識や技術は必要だが、それだけではなく、最後までかたわらに寄り添うことの大切さをその人は彼女に教えたのである。その時彼女が感じたのは、『うまくやることではなく、「心を砕く」— そのことが支えに通じる』とい

うことだった」。そして死にゆく人びとのケアに取り組んだのが、マザーテレサ、エリザベス・キューブラー・ロス、シシリー・ソンドースなど主として女性であったことが指摘されていた点もが味深い。確かにフェミニズム運動から出てきた「ケアの倫理」はこれまでの「正義の倫理」（男性優位倫理？）になかった新たな視点を与えつつある。

長い間、ホスピス医師として看取りの現場を経験し、東日本大震災で「心の相談室」にかかわってこられた柏木哲夫氏は、最近、被災者へのケアに四段階のあることを指摘している。「差し出すケア」、「支えるケア」、「寄り添うケア」、「背負うケア」の四段階である。初期の段階から徐々に深まっていきます。①「差し出すケア」はケアというよりむしろキュア、つまり地震・火事などによって生命の危機にある人への緊急医療です。技術力を上から下へ差し出すと言うことで、差し出す人の人間性はあまり問われない。救命にあたる医師は技術がしっかりしていれば人間的な温かみや親切心はそれほど重視されない（?!）。②「支えるケア」は急性期の上から下へ差し出すケアの時期から、今度は下から支えるケアが必要な時期が続く。命は助かったが、家族を亡くし、家が倒壊し、一人で避難所生活を余儀なくされた人が、持病の高血圧を悪化させ、ふらつきが出た。訴えをよく聴き、的確な降圧剤を処方し、親切に支える必要がある。支えるケアには技術力と人間力の両方が必要だ。③「寄り添うケア」は例えば避難所暮らしが長くなった場合。寂しさや孤独感、将来への不安からうつ状態になる人もいる。そんなとき、安易に励まさず、そっとかたわらに寄り添って、話を聴いてくれる人がいれば、どんなにか心が慰められることか。寄り添うケアは横からのケアである。下から支えるのではなく、横に寄り添う。そのためには人間力が要る。支えるケアは、下支えをしないと、この人は自立できないという思いが支える側にあるが、寄り添う場合には、その人が自立できる力を持っており、横に寄り添っていれば、自立を助けることができるという気持ちがある。しっかりと寄り添うためには人間力が必要である。④「背負うケア」は支えても、寄り添っても軽くならない悲しみや苦しみを持つ人へのケアである。そんな時、人間には背負いきれないので宗教の次元に入っていく（スピリチュアル・ケア）。

### 3.

「思いやり倫理」は「他者」との関係で「自己」との違いをどこにおくのか？伝統的に言われるのは論語の次の箇所である。「子貢問うて曰わく、一言にして以て終身これを行なうべき者ありや。子の曰わく、其れ恕（思いやり）か。己れの欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」（衛霊公第十五・24）。キリスト教の伝統ではもう少し積極的と考えられている。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ 7:12）は黄金律と呼ばれてきたが、逆の言い方も聖書（旧約聖書続編）にはある。「わが子よ、何をするにせよ、十分に注意し、あらゆる点で、教えが身に付いていることを示しなさい。自分が嫌なことは、ほかのだれにもしてはならない」（トビト記：14-15）。そうすると「思いやり」とはあえて「日本的」という形容詞をつけることに意味があるのか？より普遍的な（グローバルに通用するという意味での）倫理ではないか？